

Title	ニーバー兄弟の経済倫理：ヴェーバー理論に関連して（ラインホルド・ニーバー研究：共同研究報告）
Author(s)	兼松, 誠
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-4 : 20
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2663
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

共同研究報告

【ラインホールド・ニーバー研究】 ニーバー兄弟の経済倫理 ーヴェーバー理論に関連してー

11月6日(土)、本年度3回目の研究会が聖学院大学本部新館2階において催された。参加者は21名。今回は青山学院大学大学院教授の東方敬信氏に発表していただいた。

東方氏は、これまでキリスト教の経済倫理について多くの論文を発表してきているが、今回の講演はその延長に位置するものである。今日の金融危機の問題に対して、アメリカの神学雑誌が特集を組むなど、経済に対する神学の関心は高い。その際、20世紀前半の経済恐慌から出てきたクリスチャン・リアリズムから学ぶことは多いはずである。

東方氏の所論をまとめるところである。20世紀初頭の社会的福音運動は経済活動についての神学であり、神の国が歴史の中で実現するという楽観的なものであった。ニーバーはこれを批判する。かわりに彼が提示したのが、神との垂直的な関係（愛と応答）を大切にしつつ、正確な現実理解（正義と権力）を徹底する「神学的倫理学」であった。しかし、彼の「神学的人間学」に欠けているものがあるとしたら、それは垂直的な関係と正確な現実理解を媒介する先駆的共同体理論ではないかと、東方氏は考える。東方氏が、世界恐慌の時期、

カナダで活躍した「キリスト教社会秩序教会FCSO」の所論を検討する作業を通じて明らかにしたのは、ニーバー的な垂直の關係に人間の逆説的意味があるだけとするなら、人間の水平の關係つまり社会的、歴史的關係の中に積極的意味が指摘できなくなるという問題性である。しかし、またFCSOにも問題はある。それは「相互性」を重視する「神学的人間学」には希望の世界を待ち望む「忍耐」が欠けているというものである。そこで模索されるべきは、多元的人間論（センヤユヌス）などを土台にした「オータナティヴ・エコノミーの世界」ではないかと東方氏は結論付ける。

東方氏の発表後、ティータイムを経て、いつものように質疑応答の流れとなった。その際、東方氏が学生とともに実施しているフェアトレードの取り組みが紹介された。

（文責：兼松誠 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2010年11月6日、聖学院本部新館2階）



東方敬信・青山学院大学大学院教授